

は、僧帽弁逸脱に伴う重症僧帽弁逆流を確認した。血液培養を施行したところ、2セットから緑色レンサ球菌が陽性となり、抗菌薬はABPC/SBTからABPCに変更した。入院10日目より心房頻拍発作を認めるようになり心不全が代償できなくなったため、入院14日目に人工弁置換術を行った。

【考察】

周産期の感染性心内膜炎の報告は少なく、母児双方の生命を脅かす疾患である。

【結語】

帝王切開後にStreptococcus vestibularisによる感染性心内膜炎と僧帽弁閉鎖不全症を指摘され僧帽弁置換術を行った一例を経験したので報告する。

11. 当院形成外科における他科からの手術依頼 —形成外科って他に何してるの？

形成外科

大森 凜 高田 温行
最所 裕司 作道 善行

形成外科は再建外科でもあり外科系他科との合同手術で再建を担当している。また、内科からのリンパ節生検や麻酔科等のデバイス抜去や留置のアシストなど他科をまたいだ手術を行っている。今回、2021年の他科との合同手術や手術依頼の症例数とその代表例を報告する。

12. COVID-19陽性妊産褥婦への出産体験の受容や愛着形成に向けた精神的支援

伊勢田真子 魚谷 彩子
村尾 由花 藤川 優紀
齋藤 知子

当院は、総合周産期母子医療センターであり、第二種感染症指定病院であるため、播磨姫路医療圏を中心に兵庫県内のCOVID-19陽性妊産婦の受け入れを行った。COVID-19陽性妊産婦の治療は、母児双方への影響を考慮した上で方針を決定する必要がある。妊娠中は使用できる薬剤や治療に制限があるため、肺炎症状が増悪

すると突然の分娩を選択せざるを得ない場合がある。

2021年12月までに40名のCOVID-19陽性妊婦を受け入れ、その内13名が帝王切開術、1名が経膈分娩で出産された。出産に対して肯定的に捉える褥婦もいたが、否定的な思いをぶつける褥婦もいた。否定的に捉えた要因は、十分に心構えができていない時期に予期せぬ出産となったことが考えられる。今回、精神的に不安定になった褥婦の症例を通して、出産体験の受容や愛着形成に向けた関わりを考察した。どのような状況であっても安心して子育てできるような医療と看護の提供、地域との更なる連携強化に向け取り組んだ経過を報告する。

13. 当院における骨盤内臓全摘の検討

泌尿器科

森田 祥平 北村 聡
中山慎太郎 田中 幹人
西川 昌友 原口 貴裕

【発表要旨】

骨盤内悪性腫瘍（直腸癌、卵巣癌、子宮癌など）の中には、腫瘍が増大し、他臓器への浸潤が認められるにもかかわらず、遠隔臓器への転移を認めないものがある。このような骨盤内悪性腫瘍に対し、当院でも骨盤内に関わる診療科が合同で骨盤内臓全摘術を施行しているが、本術式では病期の進んだ症例が適応となるため、手術の難易度が高い、手術時間が長い、出血量が多いなど患者にとっても医療者側にとっても負担が大きい。また人工肛門造設に加え尿路変更を行い、double stomaとなる可能性も高く、患者のQOLに影響を与えることは避けられない。しかしながら本手術で予後を大きく改善できるという報告も多数あり、今回2017年から現在までに経験した10例に対して合併症や再発の有無などについて考察を行った。